
****花の人 緑の左手****

ハト

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

花の人 緑の左手

【Nコード】

N1466C

【作者名】

ハト

【あらすじ】

触れるだけで植物を生み出すことが出来る男、花を咲かせる歌を知る女性の二人組と、旅先で彼らに関わる人々の話です。

「ねえ、なんで左手なの？」

ゆきまち 雪町は楽しそうにフクドリを眺めながら尋ねた。

路肩に佇む彼女の、青の艶を持つシャンパンブラウンの美しい髪が夜風に揺れる。瘦身の中年男フクドリは、左手で壁を撫でていた。瞬きの間に、触れられた壁はしほむように形を変え、代わりに種類豊富な生き生きとした植物が生える。待っていたように生まれ出て首を伸ばす。

楚々としたつぼみの草花だった。松虫草、秋桜、紅花、虞美人草。ぼろぼろと壁の残骸が落ちて、地面に小さな山を作った。

口元を緩めながら、フクドリは彼女の疑問に答える。

「右手は握手をするためだよ」

一面の涼やかなつぼみの畑。無機質な石壁や道路の上に。

「歌でも歌いたくなる素敵な答えだね！」

雪町は陽気に手を叩き、笑うと、言葉通りに息を吸い込んだ。

名の通り白い喉が彼らの知らない言語の歌を生み出して夜風に伝わる。空に響く。望郷の異国の旋律。

それに静かに答えるように、生まれたばかりの不思議な草原に、一斉に花が咲いた。

＊ ＊ ＊

大都市とまではいかない、しかし寂れてもいない。都市から飛び火した中興の活気。河には橋が建設され、さかのぼってきた船によって魚市場が賑わう。道路は舗装され街頭商人がうるつき、新たに地位を得ようとする営業者の癒着と模索によって指揮が執られる。フリストルはそんな、向上と慣習のせめぎあう灰色の町だった。

花崗岩材をコンクリートの上に敷いた石畳のさらに上。

不思議な艶を持つシャンパンブラウンの髪をベールに隠した若い女、雪町は、何かとても楽しいことがあったかのように機嫌よく歩道を歩いていった。

「こつこつ、入り組んだざわざわした感じっていいね！ あ、ビア・シヨップがあるよ。ちよつと飲んだら気分が乗りそうだな。そういえばいい匂いがするけど、あの屋台のフライかなあ？ あは、辻馬車の白い馬がこつち見た！ ヘイキャビー、調子はどう？」

本式の話し相手といえるかどうか、背格好のひよろりとした無精髭の中年男、フクドリは旅人がよくなじんだ風情で彼女の隣に位置していた。

絶妙に相槌をはさみながら、穏やかな声を出す。

「どこかよさそう宿屋兼酒場でもあったかい？」

聞き取りやすい発音で、左手につけたくたびれた手袋をはめなおしながら。

あいにく機嫌のよい応えは、

「えーっとんつと、そのうち見つかるってねえ？ ご飯食べながら誰かに聞けばいいんじゃない？ うん、そうしょつか！」

「そうしてもいいけれど、もうちよつと待ってくれないか？」

大事な宿探し。よく言えば樂觀的な提案に、フクドリは言いながら表通りから細道をひよいとのもはためし、安ホテルでもあるかもしれなかった。

途端、数人の青年達が険しい顔つきでそこから出てきた。

「おつと……」

「失礼」

寸前で衝突を避ける。

見れば彼らは、決して裕福とはいえない、使い古しの服装をしていた。通り抜け様に言葉を交わすと、急ぐのか早足で人ごみを分けていく。フクドリがその背を見送っていた所、ついでにふらつとそれに加わる、白いガウンを羽織った若い女もいた。

透き通るような白い肌の、
雪町だった。

「おおい！ どうしたんだい？」

フクドリは見逃しかけて慌ててそれを追いかけて、

「なんかありそうじゃない？ 事件かなあ。気になるんだもの、行かなきゃ楽しくないね、きつと！」との見解。

「やれ、不謹慎だよ」

つい首をひねった。

それにつけても、彼女は細かい妙なところに注意を引かれることが非常に多かった。比例して興味を示すときはとことんである。注意力があるのなら問題ないはずだけれど、意識はしているのだろうけど、たいてい足元不安定、制御が利かず間に合わないのである。

帽子を被らない頭をひとなでして、フクドリはさらに一団の仲間に加わった。

* * *

その日のうち、日が沈む時刻。

古いパプの一角で、魚料理を前にする二人組の姿が見られた。雪町はライトラムを少しずつ飲みながら、落ちつかない周囲を気にしていた。

フクドリはいつものことではあるものの、食事をつつきながら自分の意識は彼女に傾けている。もはや、クセのようなもの。

「なんだったんだと思う？ フクドリ、頭いいから分かるんじゃない？ 人がいつぱいいいたし、豪邸だねえ、あれは。誰なんだっけ。有名な経営者さんじゃなかった？」

「ああ、そうだね。なんといったかな。交通関係の会社の社長だった気がするが」

昼間の出来事の話だ。

興味津々の雪町に着いていった先は、果たして全体像を把握する

のも困難な大邸宅だった。

そんな場所に人だかりが出来ていて、何やら揉めている様子があった。フクドリは首を突っ込む前に上手い具合にその場を離れたので、いまだ話題が繋がっている。

「ふうん、誰か知らないのかな？ うん、きつと知ってるよねえ。すみませんこんにちは！ お兄さん方、町の人？」

止める間もない。

後先人柄周囲の空気関係なく、雪町は目に入った瞬間的に話しかける。

ジョッキを手にした労働者らしい三人が胡散臭げに振り返って、おやという顔をした。

「ああ、あれか。最近フリストールがごたごたしてるのは大抵あのことだよ」

ビールをおりながら喋り好きらしい一人が言った。他の二人も慣れた様子で同意し、話題を時折かいつまんだ。美しい肌の若い女が、一見それこそ真剣に興味を示してくれたがゆえだろう。

それによると、資産家の名はアオリ・ホイッスラー。公共馬車会社の社長であった。もとより裕福な家系であったが経営は優秀、以前まで問題などそうそう起こすこともないと思われていた。

ところがどうしたものか、町の歴史的信頼のある土地を買い取るという。さらに、そこへさして必要と思えない大型小売店を建設すると噂が立つ。ついでにそれは、彼の娘の気まま勝手な要望であると聞こえてくる。あながち事実に基づいていないわけでもなければ、放って置けないのも町人の道理。

「エリ・ホイッスラーは派手好きでわきまえない人間なんだよ。アオリも、突き通すなら筋がなければ認められない町だって、理解してないんだ」

「デパートを建てるなんていつてる土地は、以前火事で焼けてしまったが、大橋をつくってくれた人々が拠点にしていた所だ。恩恵と

死者に対して敬意を表すべきなのに、なっていない」

口々に、彼らは思いを口にした。由来も不確かな嗜好酒のせいか、雪町も機嫌よく合いの手を入れる。そのうち調子に乗った彼らは、行き過ぎると下世話なことまで口にし出す。

「こうなりやベッドの上でも理解しあうかね？」

「あはは、悪くないね！」

「酔っ払うのは良くないよ。そろそろ失礼しようか、明日も長い」
なんでも軽く従い流されることも、わりと冗談ではない。

フクドリはころあいを見計らって、礼と共に雪町を席から立たせた。

###

警察官のダンは、勤務上フリストールへ赴き、一軒の酒場の扉に手をかけるところだった。騒がしい昼下がりが。

まっとうに犯罪者を追うためであったのだが、若さや誠実な性格、制服に反して彼の気分は緊張とやりがい欠けていた。理由はといえば、彼の上官である警視のやる気のない妙な思考が事件解決を邪魔することは分かっていて、ダン自身よく心の整理が出来ていなかったせいである。

仕方のない仕事だ。

ダンはためらい気味に店内に足を踏み入れ、向けられる無粋な視線を無視して歩いた。ここは昼間からそうガラのいい連中ばかりではない。だからといって、挑発する気も起こらない。相手がそうならなおさら、こちらとて願い下げなのである。

意識を分散させ注意しながら進むと、そのうち窓際にふっと目を引くものがあり、ダンはそちらへ足を向けた。

近づくにつれて、妙に心臓が騒ぐのを感じていた。それを押し隠した。

「やあ、君」

光に当たると青く輝く不思議な茶髪。

声をかけても、彼女は緩慢な動作でカップに口をつけただけで、特に興味を示さない。眠たげに目は伏せられていた。おそらく意図して無視しているのではないと、ダンにはわかった。許可も得ず勝手に向かいの席に腰を下ろした。

「久しぶりだ。ここへはいつ来たのかな」

「……さあ、いつだっけ……」

「昨日？ その前か？ まだ何もしていないようだけど」

「知らないよ……」

不機嫌で苛々した声音だった。雪町は落ち着き無く一度窓の外へ目を向けたが、それきりだった。肘をついてこめかみに手を当てていた。

ダンは息を吐いて、根気よく質問を重ねる。

「フクドリはどこへ行ったんだい？ また公共物に被害が出ると困るんだがね」

「だから、知らないっいたら……そのうち戻ってくるんじゃない……」

「君ももう、彼に着いていくのはよしたらいいんじゃないか？」

「ああ……ほつといてよ。だるいんだ、……眠いし……どうでもいい」

聞き取りにくい声。

目の前に誰がいるのか確認もしていない様子で、雪町はテーブルにうつぶせた。珈琲の入ったカップが倒れそうになったのをとっさにダンは支えて、その際に僅かに髪に触れてしまった手を、反射的に引っ込めた。意味もなく動悸がした。いや、そうではなく。

窓から射る鈍い光に艶めくシャンパンブラウンと、雪のように白いうなじにみとれた。

綺麗だった。

しかし、目を伏せる。深呼吸で感情を押し込める。

悲しくないわけではなかった。

今此処で、「好きだ」と呟いたとしても、彼女には聞こえず、あの明るい時の彼女に伝えたとしても、伝わったことにはならない事が。例えば自分がフクドリだけを追っているのだとしても、彼と共に行動する雪町も幫助罪には当てはまるかも知れず、そうはならなかったとして、フクドリに懐く雪町を自分が喜ばせるようなことは出来るはずがない事が。なにより、自分自身に関して苦しむ彼女をうまく助けてやれない事が。

本当に眠ったのか、動かない雪町の前に座ったまま、ダンはおぼんやり窓の外を眺める。もう色々話しかけて、追い詰めることはしなくなかった。生まれるのは矛盾ばかりだった。

視界に入る風景。
広がる灰色の町。

思えば確かに、自然を駆逐してこのような空間をつくるのは、愚かな行いに違いない。首都ではひどい公害もある。いつか首を締め上げられ全てを滅ぼしてしまうのも時間の問題だろう。フクドリに寛容な上官の気持ちや、彼を助ける環境保全団体の気持ちはわかった。

しかし、ダンの仕事割り切ることにはしていた。結局、なぐさめにはなれど、彼一人がどうにかできるとは思えなかった。人間が誕生したのは、地球を滅ぼすためかもしれないとすら思っていた。この有様や怠惰な自分のような考えを取つてもわかる。一時の感情にかまけて無駄に争い進歩しない。余計な能力を持ちすぎたことを鼻にかけるような高慢な種族。

だから、雪町の一見めちやくちな行動は癪に障らなかつたし、今のような無気力もよほどそこの人間より優れているように感じた。例え打ち勝てなくとも、自分が自分であるうとすることの重要性を認識する彼女には、尊敬の念を抱いた。

側にいて、ただ見ていたいと思う。

「あれ……ダン、まだいてくれたんだよねえ……。朝から、頭痛が

「しかし、迷惑かけたね。ごめんね」

「勝手に尋ねてきた警官に謝罪するとは」

「いいんだよ、今の内だもの。まともな時に誰かや何かに出会えるなんてすごいこと。嬉しいよ。フクドリのおかげかな」

「目の前にいるのがフクドリではなくて申し訳ない事だ」

「いいの。フクドリなら分かってくれる。会えるよ」

「僕もそのうち会えるといいのだけどね」

立場をわきまえないなら、信頼が眩しかった。こんなときでもいっそう皮肉を口にしてしまうのが、どうしようもない性壁に思えた。雪町はテーブルの上に視線をさまよわせ、困ったように笑う。

「何だか、何もなくて……コーヒー残りだけど要りますか」

「いや」

本当はここにこうしているだけで十分だ。

けれど、今の彼女はきつとそうではないのだ。迷った末に、言った。

「それなら歌を」

「うた？」

「君の歌を聴きたい。花を咲かせることが出来ると、誰かが言っていた。参考に」

本当は一度だけ聴いたことがあった。星の降るような夜。途切れさせてしまったことを、ずっと後悔していた。

「下手だよ」

雪町は照れるようにそう断って、小さな声で異国のメロディーを口ずさんだ。ダンは目を閉じる。

暖かくて親しい人の側にいるような。

そんな幸せな気分になった。

…*…*…*…*…*…*…

町を歩けば噂に当たる。

フリストールは今そうした状態だった。やはり筆頭はエリ・ホイッスラーの話題であり、時に治安と品格の問題や列車事故の噂に移った。

フクドリは何かと手助けをしてくれる環境団体の青年パーキンとビールを飲みながら、世の中の動きを聞き出していた。

「警察は来ているらしいけれど、相変わらず警視殿が見逃してくれるようです」

「そうか、いつもありがたい。他に何か追いかけてくるような人達はいないかい？」

「うん、今のところ妙な研究者連中も撒けているようだし、俺たちさえついてこなければあなた方は自由です」

軽く冗談を飛ばして、パーキンは笑う。一瞬周囲の視線が集まったと感じたのは、気のせいではなかったかもしれない。

エキゾチックな印象も与える非常に黒に近いアンバーモカの髪色をはじめ、涼しげな目元、通った鼻筋、引き締まった口元も按配よい。そのうえ背の高い骨格の美しい青年とくれば、多少野暮ったい服装だろうがなんだろうが洒落て見えるし、目を引く。雪町などもわざと鬱陶しい服装をする時のパーキンを色男とからかった。

「しかし、あなたにぜひ伝えてくれと、変な頼みならされましたよ」と彼は続けた。

「変な？」

「ほら、今話題のホイッスラーの愚行に関して。彼が買い取った神聖な土地に、妨害として何かでかい植物でも生やしてくれないかと町人が頼んできたんです。ずいぶん真剣だったな」

「豆の木でも生やせばいいのか？」

「なんと行っていいのやら、フクドリはそう返した。」

実をいうと、自分や雪町は何かの目的のためにやっているのではなかった。生まれ持った不思議な力に何が求められているのか真剣に悩んだ時期もあったが、それは昔の話だ。挫折や出会いを通じて、好きなようにやるのが自然に思えて、かつ自然に優しいといつか

結論した。気まぐれによつて植物たちを思い出してくれれば嬉しいし、環境を大事にしてくれるようになれば万々歳だが、一部の人々の目的に利用されるのは遠慮させて頂くのがポリシーだった。それはいくらパーキンでも同じ事。

彼はその辺をきちんと分かっていた。

「いや、もちろん断っておきましたよ。でも気をつけたほうがいかもしれない。妙なちよっかいをかけられないように。割と感情的な町ですねここは」

「ああ」

大丈夫だろうか。娘のような、仲間のような雪町の存在を思い出し、フクドリはふと窓の外へ目をやった。

+ : + : + : + :

最後のフレームの直前だった。

「悪い、あんたが『緑の手』か？」

突然無粋な声が邪魔をして、ダンは思わず声の方向を睨んだ。途端、強い力で腕を掴まれた。

「なんだ急に！」

「流石に警察ではないよな」

むりやり振りほどいて銃を手にしたところで、動きを止めた。ざっと見て五人。体格のいい男たちが群れを作っていて、内二人が雪町の近くに控えるように立っていた。彼女はあっけにとられている。胸に苦いものが広がる。せつかく体調が良いときに彼女を不安にする連中に対してひどく苛立った。

「ではあんたが『緑の手』か？ しかし、女でもなさそうだ」

「その人じゃない。関係ない。人違いだ」

頭の狂った研究者かと思つたが、服装から見るに町民にしか見えない。制服姿のダンが言い放つと、彼らは少し逡巡した。しかしリーダー格が声を発すると黙つた。

「思い出した。あんたは連れれの女だろう？ なるほど珍しい髪だ」
「違う」

「警察は黙っていてくれ。関係のあることじゃない。悪いけれど、ちよつと来てくれないかな」

雪町はうながされて目を伏せる。一瞬の後、静かに頷いた。感情を押し隠した表情だった。

「ありがたい。そつちはついてこないでくれ。もしそうしたら間違つて手を出すかもしれないからな」

「いい度胸だ」

影響力の無さがこんなところで現れる。しかし一気に五人を撃ち殺す訳にもいかず、ダンは負け惜しみと共に乱暴に椅子に座りなおした。

彼らは雪町を連れて出て行った。

行き場の無い憤り。回りまわつて、目の前にいない男に対して八つ当たりの感情が募る。何してるんだ。人様に不快な思いをさせてのうのとふらついているんじゃないかな。雪町に何かあったらハゲ上官を失脚させて間違いなく無理やりにも刑務所にぶち込んでやる。

しばらく仏頂面で座っていたダンであったが、いい加減耐えられなくなり、

「遅い！」

「誰がだい？」

我慢の限界と同時の穏やかな声だった。というか、この声は。

「つて……」

振り向くと同時にほぼ胸倉に掴みかかった。しがない風情の中年男は驚いたように身を引いたが、ダンはとにかく店の外へとフクドリを引つ張つていく。フクドリは引きずられながら、しかしそこまでの緊張感もなく、

「どこへ行くんだい？」

「どこに行ったらいいんだ！」

「いや、ええと」

なんというまどろっこしい事か。自分の返答の説明不足は棚に上げ、ダンは心の中で悪態をついた。

「雪町が町人らしい馬鹿連中に連れて行かれた。あんたを探していったんだよ。けど、いなかっただから雪町がかわりに人質にされたんだ。心当たりは？ あるんだろう？ ないはずないな？ 撃つてもいいか」

「ああ」

急にフクドリが走り出した。ダンは転倒しそうになり、舌打ちと共に併走した。とりあえず検討がつきそうではあるものの、のけ者にされているようで面白くない。

噛み付くように問いただした。

「誰なんだ」

「ホイッスラー反対派、それも町の小売店の人達かな」

「何？」

「正義の中にまぎれて、自分たちの生活がかかれば必死になるということだ」

要するに、そういうことだった。古くからの商店経営者達は新設されるといふデパートメント・ストアに危機を感じたのだ。気まぐれで造られるそんなものに客足を取られてはたまったものではない。とりあえずどうにかして妨害しようとした。そこへフクドリが現れたため、利用できるかと目をつけた。パーキンの鋭い見解だが、正しいとフクドリは踏んでいた。

ダンはしかめ面で納得する。文句を言った。

「また、彼女の歌が最後まで聴けなかった」

「ああ。彼女の歌はすばらしい」

「いつかあんたを逮捕するよ」

「いつかね」

まったく、協力せざるを得ないことがほとほと嫌になる。

＊ ＊ ＊

そして、雪町がいたのは例の建設予定地であった。

二十数人から座り込みが行われていて、その中に所在無さげに座らされていた。ダンが手を振り、声を出す。

「おい！ 『緑の手』が来たぞ、煮るなり焼くなり好きにしているからその人は解放しろ！」

「ひどいなあ」

フクドリがぼやくが、ダンには気にしない。雪町がはっと顔を上げ立ち上がりかけたが、周りがそれを押さえた。彼女を連れ出したり、ダー格の男が歩いてきた。無駄に弁明を始める。

「乱暴な真似をして悪かったと思っっているよ。どうしてもあなたに協力して欲しかったんです。町のために」

フクドリはそっけなく、

「そうらしいね。全く感心は出来ないやり方だけれど。早く彼女を放してくれないかな」

「すみません。私らの頼みをきいてもらってからそうさせてもらいます。保障はどこにもないのでね」

動じない態度をとられ、フクドリはため息を吐いた。さすがにそう上手くは行かないのだろう。

尋ねる。

「わかったよ。どうすればいいんだ？ ここをジャングルにして欲しいのか」

「出来るならば」

無茶な相談であった。

だがともかく、フクドリはそつと左手の手袋を外し、そのまま差し出した。

「じゃあ、それまで彼女をくれぐれもよろしく頼むよ」

「ああ……はい、っあかあ!？」

それは、握手をしようと皮膚と皮膚が触れた瞬間だった。

弾かれたように男は自分の左手を抱えて悲鳴を上げた。押さえた右手から赤いものが滲んで垂れる。

「雪町！」同時にダンも動いていた。飛び出して、あっけに取られる左側の男の鼻面を銃のグリップで殴りつけた。鈍い音と共にその身体が沈んだ。雪町自身も懐に手を突っ込むと、立ち上がる勢いを利用して、隠し持っていた細い刃を勢いよく滑らせる。右側にいた男の腕に赤い線が出来、悲鳴が上がった。ダンが伸びる手を払いのけ、雪町は鋭く牽制して道をあける。

ダンと雪町がその場を離れる。

追いかけてよとした男の身体にフクドリが無造作に左手を触れる。服が細かい雑草に溶けて、一瞬で皮膚に到達し、それを薄く破った。ひどい痛みであるのか、彼は苦悶の形相で膝をついた。

「人畜無害な都合のよい神様などいないんだよ」

そつと呟き、フクドリも随分騒がしくなった場所を離れる。

野次馬は出来つつあったが、警察の制服を着たダンが退けることは簡単だった。

& a m p ; # & a m p ; #

「ありがとう。何だか、びっくりした」

安全な場所まで逃れた所で、雪町が息を吐きながら礼を言う。フクドリとダンはそれぞれに後ろめたい気持ちがあったため、曖昧に聞き流した。その後気を取り直すように、

「いや、だがよかったよ。みんな無事だ。雪町も、随分安定しているじゃないか」

「わかる？ 調子がいいみたい。ちゃんとやるべきことも出来たでしょう？」

やっと雪町は微笑んだ。それをちらりと確認して、ダンが肩をすくめた。

「しかしとんでもない人間が多いことだ。真面目に仕事をするべきだとわかった。こんなことしてないで一旦帰るとするよ」

フクドリは笑って、

「今夜、この町で彼女の歌が聴けるはずだ」と言う。

若い警官は口惜しそうにフクドリを睨むと、背を向けながら言い捨てるように。

「勝手にするがいいよ。この町の公共物なんて多少緑に毒された方がいいらしい。歌だって、いつかあなたの居ないところで聴いてやるさ」

フクドリが穏やかに見送り、雪町はきよとんとした後、困ったように笑って手を振った。

姿が見えなくなった所で、二人で騒がしい町を歩く。乗合馬車の人を詰めて通り過ぎ、道の端で犬が頭を掻いていた。古着屋は家々の窓を見上げ、売り子が通り過ぎ、派手な広告の薬局やブティックが立ち並ぶ。

フクドリが提案した。

「今夜道いっぱい花を咲かせよう」

「賛成賛成！ フリストルなんて花畑にしちゃえばいいよね！ したら万事問題解決、なごみって大切だよきつと、間違いない！」

「やれ、調子が上がってきたね。案外安定するのは彼のおかげなのかな？」

「どこいく？ あ、甘いもの食べたいな」

ぼやく隙に雪町が気ままに歩き出す。慌ててそれを追いかける日常が戻ってきた。

+++

その日が何日の何曜日かも認識しない頃があった。その日暮らしのぼっかりした一人の日々。

どうでもいい汚いところでよく働いた。注意散漫で首になる。職を探す。時に春を売る。金と暇が重なればろくでもない酒場に入り浸る。出会いの日も、雪町は強い安酒に酔って、簡単に誘いに乗り肌を晒し、乱暴に扱われ、当たり前のように宿から放り出された。夜明け前だった。一人でふらふら帰るのも面倒くさくなって、汚い路地裏の壁にもたれて座り込んだ。特に何ということもない、いつものいい気分だった。通りかかった人影に、何も考えずに話しかけた。

「いい朝だね。太陽が出る前の青がすごく好きだよ。そう思わない？ 思うよねえ？ ははっ、日が昇らなければいいのに。そう、それで万事上手くいくって！ 世界はそうなってる！」

乱れた、哀れな女。何かが狂ってしまったのだろうか。

フクドリは立ち止まり、悲しそうに目を伏せた。

「そうか。日が昇らないのかい？ だから花が咲かないのかもしれないな。だから君は泣いているのかもしれないね」

「花が咲かない？ 花は咲くね！ わたしが咲かせてあげる、想像してあげるよ、寒い寒い雪の町が馬鹿みたいにあつたかいところへ憧れるみたいに」

思いつきにフクドリが左手で道路に植物を生み出しても、雪町は驚かずにへらへら笑っていた。薄汚い壁にもたれて泣いていた。彼女は何かも素敵に喜ばしく見えたし、痛くぼろぼろの何かがぼんやり胸の奥から沸き起こって、もうすぐ心が壊れるかな、と感じさせていた。

「君がそう言ってくれるのなら、咲きそうな気がするよ」

自分たちの周りを勝手に植物でいっぱいにして、フクドリは言った。ヒナゲシ、金鳳花、花独活、オグルマ、ニワシロユリ、草夾竹桃。青白い景色の中で、すべてがつぼみのままだった。

「嘘だよ。嘘しか言わないんだから、信じちゃダメだよ。雪の町は枯らすんだよ？ 人も草も動物もわたしもダメにしちゃうね」

「じゃあそれも嘘だったらいいんだけど。雪の町は、きっと知っているんじゃないかな？ 暖かさを本当に、一番大事にしようとしているのじゃないかな」

穏やかな声に、手を叩く。

ふわふわして、景色は滲み、現実ではないようで。

「そう！ そうだよ、手に入らないものが欲しいんだよ。あつたかいところと好きな人。頭悪いし欲張りだから、なあんにも掴めなくて、全部失っちゃうんだ。でもね、それでも幸せだったりするんだ。おかしいよねえ？ そんなの生きてても意味ないよねえ？ 神様許してくれないかな？ ほんのちよつとでいいから、いい夢でも見させてくれたりしないかな」

雪町は無機質な町の中で緑の涼しい風景をぼんやりみて、例えばこのつぼみが全部咲いたら嬉しいなと思った。

無意識にからからの声がこぼれた。

歌いたい気分だったから、明るい歌を歌った。

歌詞の意味は知らなかった。誰も教えてくれなかった。それでも好きな曲だった。

目の端で、固く閉じていたつぼみがほころんだ。

優しく震えるように、淡い花びらを広げた。次々に色が生まれた。フクドリが息を呑む気配。無様な歌。

雪町は、不意に、ぼんやりした向こう側のどうしようもない自分が、心の中へ重なったような静かな衝撃を受ける。あれ？ 声が詰まった。

泣いている。

泣いていた。

ああ、そうか、悲しいから、泣いているんだ。

そうに、決まっている。

すっかりしろ。わかる、わかる、わかるだろう？

雪町はやっと気付いた。

「ああ！ 咲いたじゃないか。やっと花が咲いた。ありがとう！」

* * 花の人 緑の左手 * *

フクドリが感極まった涙声を上げて、雪町の右手を握った。
夜が明けて、路地を照らし出した。風にさらさらと揺れる花に囲まれて、ようやく自分が世界の中にいるのだと、それがわかった。

PDF小説ネット発足にあたって
インターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1466c/>

＊ ＊花の人 緑の左手 ＊ ＊

2009年3月24日09時20分発行